京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **35** (2016), 129–159

アイヌ語の wa an 構文における人称接辞について

Tero Vattukumpu

【要旨】本稿では、アイヌ語のアスペクト形式の 1 つであるいわゆる wa an 構文における動詞の人称接辞について論じる。動詞の後ろに置かれる wa an は結果相（resultative aspect）を表すとされており、動詞の自他を問わず使える構文である。先行研究では、wa an と共起できる他動詞は、wa an が主語の人称・数にしか一致できないものと wa an が目的語のそれらに一致することもできるものと分類されてきた。本稿ではコーパス調査によって、wa an が目的語に一致できないとされていた一部の他動詞は目的語に一致する例が見つかることを明らかにする。このような一致パターンを、wa an 構文に完了相 (perfect) または習慣相 (habitual) の用法があることで説明できるかどうかについて検討する。さらに、自動詞と共起した wa an が主語の人称・数に一致しない奇妙な例も 1 つ紹介する。この例を、譲渡不可能な所有 (inalienable possession) によって説明できる可能性について検討する。

【キーワード】アイヌ語、人称接辞、結果相、完了、譲渡不可能な所有

1　はじめに

本論文では、アイヌ語のいわゆる wa an 構文とそれにおける人称接辞について論じる。アイヌ語は古くから日本の北部（東北地方と北海道）や樺太の南部と千島で話されていた言語であり、日本固有の言語の 1 つである (Bugaeva 2012: 461) [1]。アイヌ語は様々な方言に分かれており、大きく分けて、樺太諸方言・北海道諸方言・千島諸方言の 3 つの諸方言がある (Bugaeva 2012: 461) 。本論文で扱う方言は、北海道南部で話されていた千歳方言と沙流方言である。これらの方言は、北海道諸方言に属している。以下「アイヌ語」は、北海道諸方言に属している千歳方言と沙流方言のことを指す。

アイヌ語は言語類型論的に、複合性的 (polysynthetic) な特徴を示す膠着語 (agglutinative language) で、主要部標示型の (head-marking) 言語である。アイヌ語のテ

[1] Bugaeva (2012: 461) は、東北地方について直接述べていないが、田村 (2013: 35) は、以下のように述べている。

「 [前略] 本州の東北地方の北半分， これはアイヌ語地名がたくさん残っているということで明らかにアイヌ語話者が住んでいたということがわかります。」

ンスは、中国語などと同様に文法的に標示されないので、前後文脈や時間の副詞などによって解釈される (Bugaeva 2012: 470) 。また、基本語順は日本語と同じように SOV である。

本稿で扱う例文は、引用先が記されていなければ、筆者が作った作例である。また、例文の逐語訳における略語や和訳の仕方などは先行研究によって様々であるが、本稿における逐語訳や和訳をなるべく統一させるため、筆者が例文の和訳と逐語訳を一部改変している。逐語訳の書き方や略語に関しては、できるだけライプツィヒ大学の言語学部門によって提案されている逐語訳の規則 (The Leipzig Glossing Rules) を参考にした。

無文字の言語であるアイヌ語を表記するために本稿で採用されている正書法において、ほとんどの書記素 (grapheme) は、国際音声記号 (International Phonetic Alphabet) のそれと同じ音声を持つが、例外は以下の通りである。

表 1 ― ローマ字によるアイヌ語の正書法の一定の書記素と IPA の対応関係

正書法	国際音声記号
y	[j]
r	[ɾ]
c	[t͡ʃ] ~ [t͡s]

同じ母音の間では声門閉鎖音が発音されるが、これは正書法で示されない。例えば、ooho (深い) という単語の発音は、[o.ʔo.ho] となる。母音には、長短の区別はなく、音節末の破裂音は、無開放閉鎖音 (unreleased stop) として発音される (佐藤 2008: 5) 。

アイヌ語のアクセントは、日本語と同じように高低アクセント (pitch accent) である (Bugaeva 2012: 466) 。アクセントの付与は規則的である。単語の第一音節が閉音節である場合、または二重母音で終わる音節である場合、アクセントは第 1 音節に付与される (佐藤 2008: 14-15) 。それ以外の場合に、アクセントは第 2 音節に付与される。この規則に違反するような例外もあるが、そのような例外は正書法において「´」で示される。例えば、núpe (涙) という語の場合においては、第一音節が閉音節ではないにもかかわらず、アクセントが第一音節に付与されている。

次章では、動詞の人称接辞について解説し、第 3 章では、wa an 構文に類似する日本語の「テイル形」と対比しながら、wa an 構文の内部構造・意味・用法などについて説明する。第 4 章では、wa an 構文が他動詞と共起した場合における人称接辞について詳しく述べる。第 5 章では、筆者が行ったコーパス調査について説明し、それに

よって発見された wa an 構文の人称接辞に関する新たな問題点を指摘し、これらの問題点によって示唆される wa an 構文の意味と用法の再解釈について検討する。最後に第 6 章では、本稿の重要なポイントをまとめながら、今後の課題について論じる。

2　動詞の人称接辞について

アイヌ語には、主語と目的語のような統語関係を表す格標識はないが、動詞は、主語と目的語の人称 ・ 数と一致 (agreement) する (Bugaeva 2012: 470-471) 。この一致は、動詞に付く接辞によって実現する。これらの人称接辞の体系はやや複雑であり、この複雑さは、一定の主語の接辞と目的語の接辞が融合する場合があることや、人称接辞によって表されるアイヌ語の格配列 (morphosyntactic alignment) が人称によって異なることに由来している。各人称の人称接辞を以下の表 2 に示す （S = 自動詞の主語、A = 他動詞の主語、O = 他動詞の目的語）。

表 2 ― アイヌ語の人称接辞 (佐藤 2008: 109-110)

		S	A	O
単数	1 人称	k(u)-	k(u)-	en-
	2 人称	e-	e-	e-
	3 人称	Ø-	Ø-	Ø-
複数	1 人称 ・ 除外的	-as	c(i)-	un-
	1 人称 ・ 包括的	-an	a-	i-
	2 人称	eci-	eci-	eci-
	3 人称	Ø-	Ø-	Ø-

上の表で分かるように、2 人称と 3 人称において、S・A・O は区別されていない。さらに、3 人称は、単複の区別もなく、ゼロ形態としてしか実現しないため具現しない。1 人称は最も複雑であり、単数であるか複数であるかによって格配列も異なる。例えば 1 人称単数の場合は対格型 (nominative-accusative) となる一方、1 人称複数の場合は三立型 (tripartite) となる。1 人称複数はさらに、包括的であるか除外的であるかの区別がある。1 人称複数の S の接辞のみが接尾辞であり、それ以外のものが接頭辞

である。1 人称単数の S・A の接頭辞は、/i/ 以外の母音の前で k-という異形態として現れ、それ以外の環境では、ku-という異形態で現れる。これと同様に、1 人称除外的複数の A の接頭辞である c(i)- も /i/ 以外の母音の前で c- という異形態として現れ、それ以外の環境では、ci- として現れる。

他動詞の場合に主語の人称接辞と目的語の人称接辞が共起した場合、融合のパターンは以下のようになる。

表 3 ― アイヌ語の人称接辞の組み合わせ (佐藤 2008: 146)

主語 ⇩	目的語 ⇨	1 人称単数	1 人称複数（除外的）	1 人称複数（包括的）	2 人称単数	2 人称複数	3 人称単数	3 人称複数
1 人称単数		―	―	―	eci-	eci-	k(u)-	k(u)-
1 人称複数（除外的）		―	―	―	eci-	eci-	c(i)-	c(i)-
1 人称複数（包括的）		―	―	―	―	―	a-	a-
2 人称単数		en-	un-	―	―	―	e-	e-
2 人称複数		en-	un-	―	―	―	eci-	eci-
3 人称単数		en-	un-	i-	e-	eci-	Ø-	Ø-
3 人称複数		en-	un-	i-	e-	eci-	Ø-	Ø-

アイヌ語において、包括的 1 人称複数はさらに次の 3 つの用法もある。

① 不定人称を表す。 (佐藤 2008: 202-204)
② 2 人称敬称を表す。 (佐藤 2008: 210-212)
③ 雅語において全ての 1 人称を表す。(佐藤 2008: 260-263)

包括的 1 人称複数の人称接辞には多義性があるため、本稿の例文の逐語訳では上の 3 つの用法を一括して不定人称 (INDEF) とする。実際の意味は和訳で示されている[2]。

3　wa an 構文について

アイヌ語のアスペクト形式の 1 つとして考えられるいわゆる wa an 構文は、述語となっている動詞の後ろに置かれるものである。wa an 構文は、wa という接続詞と an という存在を表す状態動詞からなっている。

通常、wa an 構文に関する先行研究で、wa an 構文は変化の結果状態を表すと記述されている (田村 1997; 中川 1981; 佐藤 2006, 2007a, 2007b, 2008 等) 。したがって、wa an 構文は結果相 (resultative aspect) を表すものであり、概ね以下の日本語の例文であれば「ている」の用法に相当すると考えて良い。

(1)　木が倒れている。　　（状態の変化）

(2)　舟が到着している。　　（位置の変化）

(3)　布が裂けている。　　（状態の変化）

(4)　秀吉が家に入っている。　　（位置の変化）

(1-4) の例文をアイヌ語に訳すと次のようになる（(1) = (5) 、(2) = (6) 、(3) = (7) 、(4) = (8)）。

(5)　ni　Ø-hokus　wa　Ø-an
　木　3-倒れる　CONJ.CONS　3-ある/いる.SG
　「木が倒れている。」

(6)　cip　Ø-sirepa　wa　Ø-an
　舟　3-到着する　CONJ.CONS　3-ある/いる.SG
　「舟が到着している。」

[2]　包括的 1 人称複数が包括的 1 人称複数以外の用法で使われる場合、表 3 で示してある接辞の組み合わせのパターンと違って、包括的 1 人称複数の他動詞における A の接頭辞である a- は他の人称の O に付く接頭辞と共起することができる。例えば、a-en-omap (INDEF-1S.OBJ-可愛がる) ‘私は可愛がられる’ (佐藤 2008: 206) 。

(7) senkaki Ø-yaske wa Ø-an
布 3-裂ける CONJ.CONS 3-ある/いる.SG
「布が裂けている。」

(8) HIDEYOSHI uni ta Ø-ahun wa Ø-an
秀吉 家.LCT に 3-入る.SG CONJ.CONS 3-ある/いる.SG
「秀吉が家に入っている。」

つまり、先行研究で記述されている wa an 構文の機能を日本語との対応関係で説明すると、日本語の「テイル」の変化の結果状態の用法に相当すると言える[3]。

3.1 wa an 構文の内部構造

上でも述べたように、wa an 構文は、wa という接続詞と an という存在を表す状態動詞からなっている。wa an の an は、単独で使うことも可能な自動詞であり、日本語の「いる・ある」に相当する存在動詞として使われることが多い (田村 1996: 9) 。an はその他、「住む」や「生まれる」という意味で使うこともできる (田村 1996: 9) 。an は、oka(y)という補充形 (suppletive form) として現れる複数形がある (田村 1996: 9、460-461) 。an は自動詞なので、単独で使われる時に主語の数・人称に一致する。wa an の an は、wa の前にある述語が持つ主語の数と人称と一致し、必要に応じて複数形に変わったり、人称接辞を取ったりする。しかし、wa の前の述語が他動詞である場合に、an がその他動詞の目的語の人称・数に一致することもありえる。これについては、3.2 節と次章で詳しく述べる。以下には、wa an の an が取る語形変化の例が示してある。以下の例は全て、wa の前に自動詞が来る例である。

(9) Ø-ray wa Ø-oka
3-死ぬ CONJ.CONS 3-ある/いる.PL
「(彼(女)たちが) 死んでいる」

(10) pasuy Ø-kay wa Ø-an
箸 3-折れる CONJ.CONS 3-ある/いる.SG
「(1 本の)箸が折れている」

[3] 日本語の「テイル」は自動詞においてのみ、変化の結果状態を表しうるので、他動詞の場合に、wa an 構文に相当する日本語の形式は「テアル」となる。

(11) uni ta ahup-as wa oka -as
家.LCT に 入る.PL-1P.EXCL.S CONJ.CONS ある/いる.PL-1P.EXCL.S
「私たちは家に入っている。」

3.1.1 wa について

接続詞の wa は、機能的に日本語の動詞のいわゆる「テ形」に似ている。wa は、動詞句の後ろに置かれ、その動詞句とそれに後続する動詞句をつなぐために使われている (佐藤 2008: 44-45) 。Tamura (2000: 149-150) によれば、wa には、等位接続詞 (coordinating conjunction) と従属接続詞 (subordinating conjunction) の両方の用法がある。佐藤 (2008: 45-46) は、wa に関して、「 [前略] 様々な意味関係を表すが、用法の境目がはっきりしない場合も多い。」と述べ、その意味関係の種類として以下の 3 つをあげる。

① ある行為に引き続いて別な行為が行われることを表す。
② ある行為が原因で、別な行為が生ずることを表す。
③ 付帯状況、動作の行われ方を表す。

さらに佐藤 (2008: 46) が指摘しているように、wa は日本語の「テ形」と類似している一方、「テ形」に比べて wa における主語の一致に関する制約が緩い。wa の前後にある節の主語が互いに違っていても問題がない。このため、wa an 構文が他動詞と共起した時に、an はその他動詞の目的語の人称・数に一致することも可能であると考えられる。これについては、3.2 節と次章で詳しく述べる。また、wa は一次的に前後関係を示すような継続的なできごとをつなぐための接続詞であるという指摘もある (佐藤 2008: 46) ので、wa を本稿で「継続接続詞」(continuous conjunction; CONJ.CONS) とする。

3.2 動詞の自他による wa an 構文の変種

中川 (1981: 132-133) によれば、wa an 構文は wa an の前にある動詞の他動性により 2 つのタイプに分類することができる。さらに、その動詞が自動詞か他動詞かによって、wa an 構文の an の語形変化に違いがみられる。

wa an 構文の an は、自動詞の後ろに出現している時、その自動詞と同じ人称接辞を取る必要があり、必要に応じて複数形の oka(y) に変わる。言い換えれば、wa an の an

は、その自動詞の主語の人称・数と一致しなければならない。

これに対して、wa an 構文が他動詞の後ろに置かれると、その他動詞と wa an の an との人称・数の一致に関しては、2 つのパターンが可能である。これらのパターンについては次章で詳しく述べる。

3.3 wa an 構文と共起可能な動詞

アイヌ語学において、アイヌ語の動詞は従来「状態性動詞」と「非状態性動詞」に分類されている (中川 1981: 132) 。知里 (1942: 503-504) などの指摘にもよれば、状態性動詞は、単独で不完結相 (imperfective aspect) を表し、時間を表す副詞などが特にない文脈ならば、現在のできごとを表す。これに対して、非状態性動詞は、単独では、完結相 (perfective aspect) を表し、時間を表す副詞などが特にない文脈ならば、過去のできごとを表す。進行相 (progressive aspect) と 習慣相 (habitual aspect) という不完結相を表す形式と共起した場合は、不完結相を表す (知里 1942: 503-504) 。

状態性動詞と非状態性動詞にそれぞれどの動詞が分類されるかに関して、中川 (1981) は、次のように述べている。

> 「 [前略] 前者 [4] に属するとされているものは、pirka『良い』, poro 『大きい』 等のいわゆる日本語の形容詞にあたるもの, eraman『わかる、知っている』, kor『持つ, 持っている』, an『ある』, ne『である』 等の動詞で, すなわち, 単独で＜静的な状態＞を表わし得る （＜状態性＞を持つ） 動詞と考えられる。また, 後者 [5] はそれを表わし得ない（＜状態性＞を持たない）動詞ととらえられる。」 (中川 1981: 131-132)

さらに、状態性動詞に関しては、起動動詞 (inchoative verb) として使うことがあるという指摘も重要である。例えば中川 (2004: 41) は、「アイヌ語では一般に『ある状態である』 ことと 『その状態になる』 ことは、表現の上で区別されません.」と指摘している。poro (大きい) という状態性動詞は、「大きくなる」という意味にもなる。中川 (2004) は、poro (大きい) に関して以下の 2 例をあげている。

[4] ここの「前者」は、状態性動詞を指している。
[5] ここの「後者」は、非状態性動詞を指している。

(12) teeta wano tan pet Ø-poro ruwe Ø-ne
昔 から この 川 3-大きい NMZ.EV 3-である
「昔からこの川は大きい (水が多い) 」 (中川 2004: 41)

(13) apto Ø-as wa nísap-no pet Ø-poro ruwe Ø-ne
雨 3-降る CONJ.CONS 急である-ADV 川 3-大きい NMZ.EV 3-である
「雨が降って急に川が大きくなった (水かさが増した) 」 (中川 2004: 41)

wa an 構文と共起可能な動詞が決まる基準は、状態性と関係している。状態性動詞は変化を伴う起動動詞としても機能できるので、変化の結果状態、すなわち結果相 (resultative aspect) を表す形式である wa an 構文と共起することが可能である。非状態性動詞において、wa an 構文との共起可能性は、それぞれの動詞の語彙的アスペクト (lexical aspect) によって決まる。中川 (1981) と佐藤 (2006) は wa an 構文と共起可能な動詞に関して行った調査によって、非状態性動詞の wa an 構文との共起可能性を決める要素は限界性 (telicity) であることを示した。非限界的 (atelic) な動詞である活動動詞 (activity verb) と一回叙実動詞 (semelfactive verb) は wa an 構文と共起できない。このような動詞の例としては例えば、apkas (歩く)、esna (くしゃみをする) などがあげられる (中川 1981: 135) 。これに対して、限界的 (telic) な動詞である達成動詞 (accomplishment verb) と到達動詞 (achievement verb) は wa an 構文と共起できない。このような動詞の例としては例えば、ray (死ぬ)、hokus (倒れる)、tup (移る) などがあげられる (中川 1981: 132) 。wa an 構文との共起可能性について以下の表にまとめる。

表 4 ― wa an 構文との共起可能性

		限界性(telicity)	wa an 構文との共起可能性	例
状態性動詞	状態動詞の用法	非限界的 (atelic)	×	poro「大きい」
	起動動詞の用法	限界的 (telic)	○	poro「大きくなる」
非状態性動詞	達成動詞	限界的 (telic)	○	tup「移る」
	到達動詞	限界的 (telic)	○	ray「死ぬ」
	活動動詞	非限界的 (atelic)	×	apkas「歩く」
	一回叙実動詞	非限界的 (atelic)	×	esna「くしゃみをする」

4　他動詞の場合における wa an 構文の人称接辞のパターン

wa an 構文が他動詞の後ろに置かれる場合、その他動詞と wa an の an との人称・数の一致に関しては 2 つのパターンが可能である。1 つ目のパターンを以下の (14) の例文に示す。

(14)	sinnay-no	Ø-an	amip	e-Ø-mi	wa	e-an
	違う-ADV	3-ある/いる.SG	服装	2S-3-着る	CONJ.CONS	2S-ある/いる.SG

「変わった服を着ているね」　(中川 1981: 133)

(14) の例文では、他動詞である mi (着る) は、主語の人称 ・ 数と一致している。これは、主語が 2 人称単数であることを表す接頭辞である e- が mi (着る) に付いていることによって分かる。さらに、mi (着る) は同時に目的語とも一致している。これは、目的語が 3 人称であることを表す接辞が e- と mi (着る) の間にゼロ形態として現れていることによって分かる。

wa an 構文の前の mi (着る) は、2 つの人称接辞も担っており、要するに 2 つの一致を起こしているので、(14) の例文は wa an 構文の an が一致できる選択肢が 2 つもあるという点で、これまでに見てきた自動詞の例と大きく異なる。an は自動詞であるため、主語と目的語の両方に一致するという選択肢はない。言い換えれば、mi (着る) という他動詞の後ろで、wa an 構文の an は、その他動詞の主語の人称 ・ 数と一致するか、それとも目的語の人称 ・ 数と一致するかが問題となる。

(14) の例文を見て分かるように、mi (着る) の後ろの wa an 構文の an にも、mi (着る) と同様に e- が付いている。つまり、an の主語が 2 人称単数であることになる。したがって、(14) の例文において、wa an 構文の an は、自動詞の例と同じように、前にある動詞が持つ主語の人称 ・ 数と一致している。これは、他動詞が wa an 構文と共起している場合の 1 つ目のパターン、つまり、wa an 構文の an が前の動詞の主語の人称 ・ 数と一致するパターンである。このパターンを仮に、「主語パターン」と呼ぶことにする。

mi (着る) という動詞に関しては、後ろの wa an の an が mi (着る) の主語の人称 ・ 数と一致する例として、佐藤 (2008: 195) も類似の例をあげている（以下の (15) の例文）。

(15)	Ø-pirka	amip	patek	ku-Ø-mi	wa	k-an	wa
	3-良い	服	ばかり	1S.SBJ-3-着る	CONJ.CONS	1S.SBJ-ある/いる.SG	よ

「良い服ばかり私は着ているよ」　(佐藤 2008: 195)

他動詞と wa an 構文との共起にあたる人称と数の一致のもう 1 つのパターンは、wa an 構文の an が前にある他動詞が取る目的語の人称 ・ 数と一致するパターンである。このパターンを仮に、「目的語パターン」と呼ぶことにする。目的語パターンの実例を以下の (16-19) に示す。

(16) noya a-Ø-kar wa a-Ø-satke wa Ø-oka
ヨモギ INDF.A-3-取る CONJ.CONS INDF.A-3-干す CONJ.CONS 3-ある/いる.PL
「私がヨモギを取って干してある」 (佐藤 2006: 57)

(17) inaw k-Ø-asi wa Ø-an ruwe Ø-ne
御幣 1S.SBJ-3-立てる CONJ.CONS 3- ある/いる.SG NMZ.EV 3-である
「御幣を私はたててあるのだ」 (佐藤 2006: 57)

(18) a-Ø-kar wa Ø-an pe a-Ø-uwoma-re
INDF.A-3-作る CONJ.CONS 3-ある/いる.SG もの INDF.A-3-集まる-CAUS
「私は作ってあるものを集めた」 (田村 1985: 32)

(19) topenpe k-Ø-ukao wa Ø-an kusu ku-Ø-sanke
甘いもの 1S.SBJ-3-しまう CONJ.CONS 3-ある/いる.SG ので 1S.SBJ-3-出す
「甘いものがしまってあるから出してきましょうか」 (中川 1981: 134)

他動詞が wa an と共起した際に、主語パターンと目的語パターンのどちらになるかは動詞によって決まっており、一定の傾向があると考えられる (中川 1981: 132-134) 。中川 (1981: 133) は、主語パターンと目的語パターンに関して、2 人のインフォーマント（川上氏と木村氏）に 30 件の他動詞の人称と数の一致のパターンについて尋ねた結果、これらの動詞をパターンによって 4 つのグループに分けることができた。これらのグループは以下の通りである。

① 両方のインフォーマントの意見で主語パターンは言えるが、目的語パターンは不適切である。
② 目的語パターンが言えるかどうかに関して意見が異なる。
③ 両方のインフォーマントの意見で主語パターンと目的語パターンの両方が言える。

④　主語パターンが言えるかどうかについて問題がある[6]。

中川 (1981) によれば、他動詞の一致のパターンに関する相違は、他動詞の主語に対する変化があるかどうかによって説明できる (1981: 133-134) 。中川 (1981: 133) は、そもそも多くの他動詞が wa an と共起可能であると指摘した上で、「＜主体の状態の変化＞を表わすものと、＜対象の状態 ・ 位置の変化＞を表わすものの二つに区分できる。(中川 1981: 132) 」と主張した。

本稿で問題となる上のグループ①の他動詞（両氏のインフォーマントによれば、主語パターンは言えるが目的語パターンが言えない動詞）を以下の表 5 に示す。

表 5 － インフォーマントによる wa an 構文の主語パターンのみが言える他動詞

動詞	和訳
ani	持つ [7]
kor	持つ
mi	着る
nu	聞く
o	乗る
se	背負う
tére	待つ
us	履く

[6] 中川 (1981: 133) は、④に関して「詳細は略す」としか述べていない。したがって、絶対に主語パターンが言えないという動詞は、知る限りでは存在しないということになる。

[7] 表 5 の ani という動詞は、中川 (1981: 133) で、「持つ」という和訳をされているが、その下の kor という動詞も「持つ」という和訳になっている。田村すず子の『アイヌ語沙流方言辞典』によれば、kor の主な意味は、(日本語の「持つ」に訳せない用法を除いて) 「～持つ ・ ～を所有する」である (田村 1996: 333) 。これに対して、ani の意味について同辞典では、次のように述べられている (田村 1996: 12-13) 。

「...を（手 ・ 腕に）持つ（方言：たなぐ） / だく、 ...を持って/だいて運ぶ」

また、田村の辞典 (田村 1996: 13, 333) によれば、kor と ani の英訳としては、have (kor) と hold (ani) があげられる。このような意味合いの違いを理解した上で、中川 (1981: 133) の和訳のままにしておくことにする。

表 5 の動詞を見てみると、確かに中川 (1981: 133) が述べたように、主体の変化を表すものがあることが分かる。例えば、kor (持つ) のような所有を表す動詞や mi (着る)・us (履く) のような着衣動詞は、主体の変化を表す。ただ、o (乗る) が表すのは、主体の状態の変化よりも、位置の変化であると考えた方が良い可能性がある。したがって、中川 (1981: 133) は、「主体の状態の変化」について述べているが、より広い意味で「主体の変化」と捉えるべき必要性がある可能性がある。中には変化を表すと解釈しにくい動詞（例えば、tére (待つ)）もあるが、これらの動詞が引き起こす wa an 構文の用法に関する問題点は本稿で扱わないことにする。先行研究による wa an 構文の an が一致するパターンを以下の表 6 にまとめる。

表 6 － wa an 構文の一致のパターン

	V (自動詞）+ wa an	**V (他動詞) + wa an**	
パターン	wa an の an は V の主語の人称・数と一致する。（＝主語パターン）	wa an の an は V の主語の人称・数と一致する。（＝主語パターン）	wa an の an は V の目的語の人称・数と一致する。（＝目的語パターン）
パターンが使える場合	全ての自動詞の場合に使われる	主体の変化を表すために全ての他動詞の場合に使える。	対象の変化を表すために一部の他動詞の場合に使える。

4.1 一般言語学の観点からの理論的枠組

前節までは、動詞の自他による wa an 構文の一致パターンに関する先行研究をアイヌ語学の観点から紹介したが、本節では、一般言語学的な観点から結果相を扱った先行研究の 1 つである Nedjalkov (1988) の結果相構文の分類を導入する。

Nedjalkov (1988: 8-11) による分類の中から 3 種類の結果相構文を以下に示す。上記の wa an 構文における人称パターンを以下の 3 種類の結果相で説明できる。

① 主語結果相 (subjective resultative)
② 目的語結果相 (objective resultative)
③ 所有結果相 (possessive resultative)

Nedjalkov (1988: 6) は結果相を「以前の動作 (action) によって発生した状態 (state)」を表すものとして定義している。その動作と状態の主語が同じである場合は主語結果相であり、その状態の主語がその前の動作の目的語である場合は目的語結果相である (Nedjalkov 1988: 9) 。また、前の動作の目的語が主語の身体の一部や所有物などである場合は所有結果相である。このような時にも、結果相が表す状態の主語は前の動作の主語と同じである (Nedjalkov 1988: 9-10) 。

上記の結果相の種類の説明を踏まえて上記の例文を考えると、例えば、(8) と (9) は主語結果相であり、(16-19) は目的語結果相であり、(14) と (15) は、所有結果相である。

5　コーパスによる調査とその結果

コーパスから新しい wa an 構文の例を探し、調査を行った。調査した結果、上で述べたような先行研究による wa an 構文における人称接辞の規則に関する問題点が発見された。本章では、これらの問題点と行った調査の詳細について論じる。

調査のコーパスとして使ったのは、田村すず子の 『アイヌ語音声資料』 というシリーズである。具体的には、このシリーズの第 1 巻から第 6 巻までのものを使った。この 6 巻は、田村によって 1955 年から 1969 年にわたって録音された様々なアイヌ語で語られた会話・昔話・歌謡・神謡を文字化されたものである。全巻には、日本語訳も付いている。

wa an 構文の例を探すためには、第 1 巻から第 6 巻に出てくる全ての語彙が収録されている索引を使った。この索引は、『アイヌ語音声資料 (1-6) 語彙 全用例つき』 というタイトルで出版されている。索引の巻数は 3 冊であり、wa an 構文の例が収録されている下巻（『アイヌ語音声資料 (1-6) 語彙: O-Z』）を参考にしながら、wa an 構文の用例を探した。見つかった wa an 構文の例の数は、157 件である。wa an 構文と共起した動詞の異なり語数は、84 件であった。単数形と複数形の両方の形で出現した動詞の場合、同じ動詞と見なした。以下、調査した例について、「田村のデータ」と呼ぶことにする。データの中には、例数が 3 つ以上の動詞の数が少なかった。例数ごとの動詞の数をさらに分かりやすくするために、例数ごとの動詞の数を以下の表に示す。

表 7 ― 田村のデータにおける例数ごとの動詞の数

例数	動詞の数
12	2
11	1
5	2
4	1
3	8
2	14
1	56
	（合計: 84）

田村のデータの中からは、先行研究による wa an 構文における人称接辞の規則に関する以下の問題点が発見された。以下の 2 つの問題点については順番に以下の 5.1 節と 5.2 節で論じる。

① 前章の表 5 で示した主体の変化を伴い、インフォーマントによれば主語パターンのみが言える他動詞と wa an 構文が共起するにも関わらず、an が目的語の人称・数と一致する例、すなわち目的語パターンが見つかった。

② wa an 構文が自動詞と共起するにもかかわらず、an はその自動詞の主語の人称とは別の人称の人称接辞を担う。

5.1 他動詞の場合における wa an 構文の人称接辞の例

他動詞と共起した時の wa an 構文の人称接辞は、主語パターンと目的語パターンのどちらになるかに関して、絶対的な基準を設定することができないままでありながらも、主体の変化を伴う程度によって一定の傾向を確認した。前章で述べたように中川 (1981) の 2 人のインフォーマントを対象とした先行研究によれば、主語パターンのみが言える他動詞もある（表 5)。これらの動詞を再度以下の表に示す。さらに、田村のデータで出現した例の数も示す。

表 8 ー 中川 (1981) における主語パターンのみの他動詞

動詞	和訳	田村のデータで出現した例数
ani	持つ	0
kor	持つ	11
mi	着る	3
nu	聞く	1
o	乗る	0
se	背負う	1
tére	待つ	3
us	履く	0

上の表で分かるように、これら 8 つの他動詞のうち、田村のデータの中に出現するのは 5 つだけ（kor (持つ) ・mi (着る) ・nu (聞く) ・se (背負う) ・tére (待つ)）である。中川 (1981: 133) の先行研究によれば、これらの 5 つの他動詞は主語パターンの人称と数の一致を示すことが予想されるが、実際には目的語パターンの人称と数の一致を示すものもある。以下の表にこれらの例数を示す。

表 9 ー表 8 の他動詞のうち、田村のデータで出現した動詞の一致パターン

動詞	和訳	主語パターンで出現した例数	目的語パターンで出現した例数	パターンが不明な例数	合計の例数
kor	持つ	5	5	1	11
mi	着る	1	2	0	3
nu	聞く	1	0	0	1
se	背負う	0	1	0	1
tére	待つ	1	0	2	3

上の表で分かるように、目的語パターンであることが確実に分析できた他動詞は、kor (持つ) ・ mi (着る) ・ se (背負う) の 3 つの動詞である。これらの 3 つの動詞を仮に、**両パターン他動詞**と呼ぶことにする。

5.1.1　一致パターンの割合と用例の分析

中川 (1981) では目的語パターンでない他動詞であるとされているのに、田村のデータでは目的語パターンが確認できている 3 つの両パターン他動詞に関しては、田村のデータで出現した一致のパターンの割合を見てみると興味深いことが分かる。この割合を以下の表に示す。

表 10 ― 両パターン他動詞の一致のパターンの割合

動詞	和訳		主語パターンの割合	目的語パターンの割合	パターンが不明な場合の割合
kor	持つ		45.45 %	45.45 %	9.1 %
mi	着る		33.33 %	66.67 %	0 %
se	背負う		0 %	100 %	0 %

上の表で分かるように、これら 3 つの動詞の場合主語パターンの割合が 50 % 以下であり、これは中川 (1981: 133) が述べたことと完全に異なる結果である。

これらの両パターン他動詞のうち、目的語パターンの例の観察・分析を行う。まずは、mi (着る) の目的語パターンの例を以下に示す。

(20)　nep　ka　a-Ø-kar　ka　eaykap　pe　Ø-ne　kusu ,
何　も　INDF.A-3-する　も　できない.AUX　NMZ　3-である　ので
a-Ø-mi　wa　Ø-okay　pe　a-Ø-huráy-pa　póka
INDF.A-3-着る　CONJ.CONS　3- ある/いる.PL　もの　INDF.A-3-洗う-PL　さえ
somo　ki　no
NEG　する. AUX　ADV
「何もできないのだから、着ているものを洗いもしないで」　(田村 1985: 02)

上の例文ではまた、wa an 構文が関係節に含められており、wa an 構文と共起している mi (着る) の目的語は、関係節の主要部である pe (もの) である。主語は、1 人称である（雅語における 1 人称なので、不定人称 (INDF) として逐語訳に記されている）。okay という複数形で現れている wa an 構文の an には、具現した人称接辞がないことから、3 人称の人称接辞がゼロ形態として付いていることが分かる。つまり、okay の人称と数の一致のパターンが目的語パターンとなっているということである。もし主語パターンであるならば、okay の後ろには、（自動詞の）主語が雅語における 1 人称であることを表す接尾辞である -an が付いていることが予想される。数に関しても、okay の一致のパターンが目的語パターンであることは、mi (着る) の目的語である pe (もの) をさらに目的語としている（pe の後に出てきている） huraypa (洗う) の語形変化によって支持されている。huraypa (洗う) には、語末に複数接尾辞である -pa が付いていることから、「洗う」という動詞の複数形であることが分かる。アイヌ語の他動詞の複数形は、自動詞の複数形と違って主語の複数性を表すのではなく、原則として目的語の複数性を表すものであるので、huraypa (洗う) の前の pe (もの) の数が複数であることが分かる。これは、mi wa okay (着ている) の okay が複数形となっているということと合致している。

もう 1 つ、mi (着る) の両パターン他動詞の例を以下に示す。

(21) nísap-no arpa-an rusuy. a-Ø-eyáyanu ka
急である-ADV 行く.SG-INDF.S AUX.DES INDF.A-3-我慢する も
eaykap hi kusu, oraun, a-Ø-mi wa
できない.AUX NMZ ので それから INDF.A-3-着る CONJ.CONS
Ø-okay pe pirka hike a-Ø-kor nispa Ø-Ø-mi-pa
3-ある/いる.PL もの Ø-良い ～(の)方 INDF.A-3-持つ 主人 3-3-着る-PL
p Ø-sinna kakenca or a-Ø-o
もの 3-別である 衣桁 ところ INDF.A-3-掛ける
「急に行きたくなった。我慢できないので、それから、私が着ているもののよいもの、主人が着るものを別の衣桁に掛けた」

(田村 1985: 36)

上の例文でも、関係節の中にある wa an 構文が使われている。この場合にも、wa an 構文と共起している mi (着る) の目的語は、関係節の主要部である pe (もの) であり、複数形 (okay) として現れている wa an の an が一致するパターンが目的語パターンとなっていることが分かる。

(21) の例文は物語の中のものであり、主人公が急いで旅立つ前に持っていく服装を準備する場面を描いたものである。このような文脈のため、(21) における ami wa okay pe (私が着ているもの) は、その時に主人公が身に着けている服装を指しているという解釈には問題があると考えられる。これについては後述する。

田村のデータに例が 1 つしかなかった se (背負う) の例を以下に示す。

(22) orano néa a-Ø-se wa Ø-okay pe
それから その INDF.A-3-背負う CONJ.CONS 3- ある/いる.PL もの
cisekotor a-Ø-e-kárkar
家の壁 INDF.A-3-APPL-飾る
「それから、その背負っていたもので、家の壁を飾った」 (田村 1985: 44)

se (背負う) の例文においても、wa an 構文の an が一致するパターンが目的語パターンであることは、やはり人称接辞の違いによって簡単に分かる。se (背負う) には、(雅語における) 1 人称の接辞が付いているのに対して、okay として現れている wa an 構文の an には、3 人称のゼロ形態が付いている。また、se (背負う) の例も mi (着る) の 2 つの例と同様に、関係節の例である。

最後に、kor (持つ) の目的語パターンの 5 つの例を示す。まず、1 つ目を以下に示す。

(23) Ø-sinna kakenca or a-Ø-o okake anakne
3-別である 衣桁 ところ INDF.A-3-掛ける 後 TOP
a-Ø-kor wa Ø-an pe, Ø-pirka amip opitta
INDF.A-3-3-持つ CONJ.CONS 3-ある/いる.SG もの 3-良い 服装 全部
Ø-poro citarpe sike or a-Ø-o
3-大きい ござ 荷物 ところ INDF.A-3-入れる
「別の衣桁に掛けた後は、私が持っているもの、良い着物を全部、大きなござの荷物の中に入れた」
(田村 1985: 36)

上の (23) は、mi (着る) の目的語パターンの例文である (21) の後に出てきた例文であり、(21) と (23) の内容が関連している。この例でも、目的語パターンは人称接辞の違いによってすぐ分かる。kor (持つ) の目的語パターンの 2 つ目の例について以下に示す。

(24) ta ene okkayo Ø-Ø-kasu nispa a-ne ruwe
この ように 男 3-3-以上である 裕福な男性 INDF.A-である NMZ.EV
Ø-an kusu a-Ø-kor wa an pe
3-ある/いる.SG ので INDF.A-3-持つ CONJ.CONS 3-ある/いる.SG もの
opitta a-eci-Ø-koré
全部 INDF.A-2P-3-与える
「私はこのように、並の男には負けないくらいの長者であるので、私が持っているものを全部あなたたちにあげる」

(田村 1985: 40)

(24) の例は、人称接辞に関して(23) とよく似ている。さらに、これまでに見てきた kor (持つ) が現れる (23) と (24) に関しては、両方とも mi (着る) と se (背負う) の全ての例と同じように、関係節の例でもあるということが観察される。

両パターン動詞のうち、kor (持つ) の 1 例について表 9 ではパターンを不明とした。この例は上記の (20-24) と類似しており、目的語パターンの例として解釈すべき可能性もある。この例を以下に示す。

(25) néa Ø-onne utar Ø-onne [8] hi oraun, Ø-onne kur
その 3-年取る 人.PL 3-(老人が)死ぬ NMZ それから 3-年取る 人.SG
Ø-Ø-kor wa Ø-okay pe turano a-yup-utar-i
3-3-持つ CONJ.CONS 3- ある/いる.PL もの と一緒に INDF.A-兄-人.PL-POSS
Ø-kotan-u un tup-an wa u-w-e-kotan-ne-an
3-村-POSS へ 移る-INDF.S CONJ.CONS REC-EP-APPL-村-である-INDF.S
「その老人たちが死んでから、老人が持っていた物と一緒に兄たちの村へ移って、同じ村人どうしになった」

(田村 1989: 24)

上の例の kor wa okay (持っている) の主語は、その直前の onne kur (老人) であり、目的語はその直後の pe (もの) である。「onne kur kor wa okay (=老人が持っていた)」が pe (もの) を修飾しており、この場合の wa an 構文は関係節の中に含まれている。アイヌ語の関係節は日本語と同じように形成される (佐藤 2008: 169-172) [9]。上の例文

[8] onne は、「年とる」と「(老人が)死ぬ / 老死する」の両方の意味がある (田村 1996: 471) 。
[9] 両言語における関係節はいわゆる空所型 (gap type) ではあるが、相違点も見られる (佐藤 2008: 169-172) 。これらの相違点に関しては、ここでは省略する。

の主語である onne kur (老人) と 目的語である pe (もの) の両方の人称は 3 人称であるため、kor wa okay (持っている) の一致のパターンは、人称だけでは分からない。それに対して、数はどうであろうか。

上の例文で、wa an 構文の an は、okay という複数形になっている。kor (持つ) の主語である onne kur (老人) の数は単数である。単数であることは、onne kur という名詞句の主要部である kur (人) が、（修飾語 (modifier) なしに、単独で使われることがなく）必ず単数の人物を表す形式名詞である (Bugaeva 2012: 470) ことから判断できる。このことから、上の例文における kor wa okay (持っている) の一致のパターンは、主語パターンではないことが推測される。次に、目的語パターンであることに関しては問題があるかどうかを見ていく。

kor wa okay (持っている) の目的語である pe (もの) に関して言えば、数の単複は曖昧であり、pe という形のままではどちらとも言えない。したがって、pe (もの) の数が複数であると仮定しても問題はない。むしろ上述のように、上の例文の kor wa okay における一致のパターンが主語パターンであることに無理があるため、pe (もの) の数が複数であると仮定する必要があると言えよう。

上の考察から、kor wa okay (持っている) の一致のパターンが目的語パターンであることが考えられるが、前の文脈からすれば、onne kur (老人) の kur (人) は言い間違いである可能性もあると判断したので、この場合の wa an 構文の一致のパターンを念のために不明なものとする。

以下には、(23) と (24) 同様に関係節の例として分析できる kor (持つ) の例をさらに 2 つ示す。

(26) a-kotán-u ta e-arpa wa a-Ø-kor wa
INDF.A-村-POSS に 2S-行く.SG CONJ.CONS INDF.A-3-持つ CONJ.CONS
Ø-oka ikor or ta macikor or ta nep Ø-ne
3-ある/いる.PL 宝物 ところ に 女の宝物 ところ に 何 INDF.A-である
yakka opitta Ø-poro niyesike e-Ø-kar wa, inan kotan
CONJ.CONC 全部 3-大きい 背負い荷 2S-3-作る CONJ.CONS どの 村
or ta hene Ø-ne yakka, kewtum-u Ø-pirka utar,
ところ に でも INDF.A-である CONJ.CONC 気性-POSS 3-良い 人.PL
tan a-Ø-kor pe e-Ø-kore
この INDF.A-3-持つ もの 2S-3-与える

「私の村に行って、私が持っていた宝物や女の宝物を、何でも全部、大きな荷物を作って、どの村でも、気性の良い人たちにこの私の持ち物をあげて」

(田村 1985: 40)

(27) néa kotan or ta néa wen-kur okkaypo kotan-kor-nispa
その 村 ところ に その 貧しい-人 青年 村-持つ-裕福な男性
Ø-pó-ho Ø-ne korka, na oar tennep Ø-ne híne
3-息子-POSS 3-である けれども まだ 全くの 赤ん坊 3-である CONJ.CONS
Ø-Ø-kor wa Ø-okay pe opitta Ø-Ø-rúra-pa p
3-3-持つ CONJ.CONS 3-ある/いる.PL もの 全部 3-3-持っていく-PL NMZ
Ø-ne kusu oha-sir ta Ø-yay-hetuku-re
3-である ので 空である-辺り に 3-REFL-生える-CAUS
「その村で、その貧しい青年は村長の息子であったけれども、まだ全くの赤ん坊で、持っていたものを全部持っていかれたものであるので、誰もいない所に一人で育った」

(田村 1985: 42)

これまでに見てきた両パターン他動詞中すべての目的語パターンの例とは少し違い、次に示す kor (持つ) の最後の目的語パターンの例は、関係節の例ではないと言えないとしても、性質が少し異なっていると考えられる。以下に例を示す。

(28) oroyaciki, yup ne manu p a-Ø-kor wa Ø-an
なるほど 兄 と い う もの INDF.A-3-持つ CONJ.CONS 3-ある/いる.SG
pe sekor yaynu-an wa cís-an
NMZ と 思う- INDF.S CONJ.CONS 泣く-INDF.S
「なるほど、私は兄というものを持っていると思って、泣いた」

(田村 1986: 14)

(28) の kor (持つ) の目的語は、その前の yup ne manu p (兄というもの) である。wa an 構文の an の後ろの pe は今回、「もの」という具体的な意味よりも、動詞句を名詞句化するための形式名詞として機能している。

5.1.2　関係節との関係

これまでに見てきた両パターン他動詞の 8 つある例のうち、明らかに関係節であり、その他動詞の目的語がその関係節の主要部となっていた例が 7 つもあるので、関係節と wa an 構文の間には関連性がある可能性が推測される。つまり、(28) 以外の例文が目的語パターンとなっていることは、その他動詞の目的語が関係節の主要部となっているということによって説明できる可能性がある。しかし佐藤 (2006) ではこれに対する反例も見受けられる。以下にその例を示す。

(29)　e-Ø-kor　wa　e-an　pe　sir　ka　ta　anu
　　2S-3-持つ　CONJ.CONS　2S-ある/いる.SG　もの　地面　上　に　置く.IMP.SG
　　「お前が持っているものを地面に置け」　(佐藤 2006: 58)

上の (29) では、(20-27) と同じように kor (持つ) が wa an 構文と共起しており、関係節の中に含まれている。また、その関係節の主要部である pe (もの) が kor (持つ) の目的語となっているのも、(20-27) と同様である。

(20-24) と (26-27) における wa an 構文の an が一致するパターンが目的語パターンとなっている。これは、wa an 構文が関係節に含まれており、その主要部が wa an 構文と共起他動詞の目的語であることに由来するとすれば、(29) においても wa an 構文の an が一致するパターンが目的語パターンになっているはずであるが、(29) は主語パターンを示している。これは、kor (持つ) と wa an 構文の an の両方が 2 人称単数の人称接辞を取っていることによって判断することができる。(29) のような例の存在によって、 (20-24) と (26-27) における目的語パターンを関係節では説明できなくなる。

5.1.3　wa an 構文の意味と用法の再解釈の可能性

関係節かどうかが無関係であるとすれば、両パターン他動詞の目的語パターンの例は、何によって説明できるのであろうか。既に述べたように、主語パターンの利用に関して重要な要素であるのが主体の変化であるということが中川 (1981) によって指摘されている。本節で扱った 3 つの両パターン動詞（省略）は、いずれの場合もそれが表す出来事が何らかの主体の変化を伴うと考えられる。これら 3 つの動詞のすべての場合において、他動詞の目的語であるものが主語の所有物になるか、もしくは主語の身に付くものである。要するに、このような主体の変化があるからこそ、wa an 構

文の an の一致のパターンが主語パターンになるという解釈が適切であろう。そうであるとすれば、wa an 構文の an が目的語パターンによって人称接辞を取った場合に、主体の変化がないという考え方ができる。主体の変化がないというのは、wa an 構文と共起したその他動詞は、その文脈で主体の変化を伴わないようなできごとを表していると考えられる。このように考えると、両パターン他動詞の例文の文脈を見て、その他動詞が主体の変化を伴わないできごとを表しているかどうかを考える必要がある[10]。

本節で扱った両パターン他動詞の例文（(20-24) と (26-28)）の中で、主体の変化を表していないと考えられる最適な例として mi (着る) の例である (21) をあげたい。(21) の例文では、物語の主人公は急に旅立つように決め、荷造りのために着ている物の中で最も良いものを選び、持っていくための準備をしている場面が描かれていた。

mi (着る) という着衣動詞が表すできごとに関して、主体の変化がない場合を考えてみれば、実際にその服装を着ていない場合が考えられる。日本語の「着ている」という言い方は結果相的に、着ている状態にあることを表すこともあれば、経験の完了のように「昨日着ている」のように参照時に着ていないことを表すこともある。さらに、習慣相のように「普段着ている」のような用法もできる。この後者のような意味をアイヌ語において、mi (着る) と wa an 構文の組み合わせによって表すことができる、つまり wa an 構文にも経験の完了もしくは習慣相の用法があるとすれば、両パターン他動詞の一致のパターンが目的語パターンになりうるという事実が説明できる可能性がある[11]。

既に少し述べたように、(21) における文脈からすれば、(21) の a-mi wa okay (着ている) は変化の結果状態を表すという解釈より、習慣相、または経験の完了と解釈する方が自然であると考えられる。言い換えれば、a-mi wa okay pe (私が着ているもの) は、主人公がその時点に着ている服装（＝その時点に主人公の身に付いている服装）であるという解釈より、a-mi wa okay pe (私が着ているもの) が表しているのが、例えば「普段着ているもの」や「着たことがある」であるという解釈の方が自然であるということである。

両パターン他動詞の他の例文（(20) 、(22-24) と (26-28)）の中では、wa an 構文が

[10] 実際、先行研究において主語パターンと目的語パターンの両方を取れる動詞に分類されているものは、客体の変化のみならず、主体の変化を表すものとしても捉えられると報告されている (中川 1981: 134) 。

[11] 一般的に、習慣相 (habitual aspect) は、アイヌ語で kor an という形式によって表される (佐藤 2008: 197、 田村 1997: 49) 。kor an は、不完結相 (imperfective aspect) を表す形式であるため、習慣相以外に、進行相 (progressive aspect) を表す機能も果たしており、日本語の「テイル」の習慣相と進行相の用法に相当するものである。

習慣相、または経験の完了を表すという解釈の方が自然であるように考えられるのは、kor (持つ) を用いた例文 (27) である。(27) の例文は、村長である父親が亡くなり、1 人で育った青年の話の中からのものである。(27) における kor wa okay pe (彼が持っていたもの) が指しているのは、父親が亡くなってから他人に取られ、持っていかれたものであるため、主人公がもう持っていないはずのものである。したがって、結果相（その時点に持っているもの）という解釈よりも、経験の完了（以前持ったことがあるもの）という解釈の方が自然であると考えられる。(21) と (27) 以外の例文（(20) 、(22-24) 、(26) と (28)）に関しては、習慣相、または経験の完了と解釈する方が自然とは言えないが、そのような解釈ができないとも言えないだろう。

(21) に関しては、その時点で身に付いている服装の中で良いものを衣桁に掛けるという解釈ができないという証拠がないため、上述の両パターン他動詞の目的語パターンと習慣相・経験の完了との関係に関する考察は解釈の問題にすぎないという考え方ももちろんできる（(27) も同じである）。これは認めざるを得ないことであり、解釈の問題でしかないという結論にすると議論はそれで終結してしまう。ただ、両パターン他動詞の目的語パターンの場合に wa an 構文が表しているのが結果相よりも習慣相 ・ 経験の完了である可能性があるということが、(21) や (27) のような例文によって示唆されていることも無視できないことであり、他動詞と共起した wa an 構文の an が一致するパターンの選択が wa an 構文の意味をどのように変えるかということをさらに調べる必要がある。また、wa an 構文に結果相以外のアスペクト的な意味・用法があれば、中川 (1981) の wa an 構文との共起可能性による動詞分類なども再考する必要が出てくる可能性がある。

5.2 自動詞の場合における wa an 構文の人称接辞の例

既に述べたように、wa an 構文の an は必ず前の動詞と同じ人称・数に一致することから、自動詞の場合には選択肢は当然ながら 1 つしかない。すなわち、wa an 構文が自動詞と共起した時に、wa an 構文の an はその自動詞の主語の人称・数と一致しなければならない。

田村のデータの中には、この基礎的な規則に違反しているような例がある。この例外は、 wa an 構文が自動詞と共起しているのに、wa an 構文の an はその自動詞の主語の人称とは別の人称接辞を担っている。このような例を以下に示す。

(30) e-hinakor-o Ø-arka wa e-an
2S-どこか-POSS 3-痛い CONJ.CONS 2S-ある/いる.SG
「(あなたは) どこか痛いのですか」 (田村 1988: 60)

上の例文の和訳は、田村 (1988: 60) による和訳を参考にしているが、wa an 構文にもたらされる結果相性を和訳にも反映させるならば、「どこか痛いか」というよりも、「どこか痛くなっているか」というように訳した方が良い。この例文では、wa an 構文と共起している自動詞は、状態性動詞である arka (痛い) である。arka (痛い) の主語は、ehinakoro (あなたのどこか) であるので、arka (痛い) の主語は 3 人称である。これは、arka (痛い) の人称接辞によって反映されている 3 人称のゼロ形態である。arka (痛い) は自動詞であるため、後ろの an はこの主語と同じ人称接辞を取るはずである。しかし、見て取れるように、an に付いているのは、2 人称単数を表す接頭辞 e- である。つまり、wa an 構文と共起している arka (痛い) が 3 人称の接辞を取っていながらも、an はなぜか 2 人称単数の接辞を取っていることによって、wa an 構文が自動詞と共起する時に an が必ずその自動詞と同じ一致の仕方をするという規則が守られていないということが分かる。

arka (痛い) の主語が明らかに 3 人称であるにもかかわらず、an が取っているのは 2 人称単数の接辞であることは、一見説明し難い事実にも見えるかもしれないが、このような妙な一致のパターンを説明するための解決案が全く考えられないわけでもない。

厳密に言えば、(30) における疑問文で具合を問われるのが、確かに「あなたのどこか」という、3 人称として表される物体であるが、より広い意味では、「あなた」という 2 人称で示される相手であると考えられる。(30) の例文において決して無視できない大事なポイントは、arka (痛い) の主語である ehinakoro (あなたのどこか) の語構成である。アイヌ語は、原則として主要部標示型の言語であり (Bugaeva 2012: 461) 、アイヌ語における所有名詞句も同様である[12]。そのため、所有名詞句の主要部になれるものは、所有名詞句の主要部になる時に、所有形 (POSS) の形を取って語形変化をする (Bugaeva 2012: 469) [13]。所有形は多くの場合に、語末に母音が付加されることによって形成される。さらに、所有形に変化したものには、他動詞の主語 (A) の場合と同じ人称接辞が付く (Bugaeva 2012: 469) 。ただ、所有名詞句の主要部が場所関係を表すいわゆる位置名詞である場合に、他動詞の目的語 (O) の場合と同じ人称接辞が使われる。所有形の生産性に関しては、アイヌ語諸方言の間に相違が見られる。ほとんどの名詞が所有形を持つ方言もあれば、所有形が形成できる名詞が限られている方言もあ

[12] 以下述べるように、そうではない場合もある。
[13] アイヌ語学では、「所属形」と呼ばれている。

る (Bugaeva 2012: 469) 。本稿で扱っている沙流方言と千歳方言は、後者の方であり (佐藤 2008: 151-153、Bugaeva 2012: 469) 、所有形は主に譲渡不可能な所有 (inalienable possession) を表すためにしか使われない (佐藤 2008: 151) 。譲渡可能な所有 (alienable possession) を表すためには普段、kor (持つ) を利用した関係節が使われる (佐藤 2008: 151) 。以下に例を示す。

(31) a. tek 手 → ku-tek-e 私の手 (1S.SBJ-手-POSS)
b. par 口 → Ø-par-o 彼(女)の口 (3-口-POSS)
c. kisar 耳 → PIKACHU Ø-kisar-a ピカチュウの耳 (3-耳-POSS)

(32) a. osmak 後ろ → en-osmak-e 私の後ろ (1S.OBJ-後ろ-POSS)
b. piskan 周り → DORAEMON Ø-piskan-i ドラえもんの周り (3-周-POSS)

(33) a. cip 舟 → ku-Ø-kor cip 私の舟
1S.SBJ-3-持つ 舟
b. emus 刀剣 → HIDEYOSHI Ø-Ø-kor emus 秀吉の刀剣
秀吉 3-3-持つ 刀剣

上の (31) と (32) は、譲渡不可能な所有の例であり、その中の (32a) と (32b) は、位置名詞の例である。(33) は、譲渡可能な所有の例である。アイヌ語における所有名詞句に関する上述の説明を踏まえ、(30) の arka (痛い) の主語であった ehinakoro (あなたのどこか) の話に戻る。

ehinakoro (あなたのどこか) は、(32) で見た位置名詞のパターンに当てはまる。(30) の逐語訳でも分かるように、ehinakoro (あなたのどこか) は以下のような構造をなしている。

表 11 ー ehinakoro (あなたのどこか) の語構成

e-		hinakor		-o
2S-		どこか		POSS
人称接辞		位置名詞		所有形接尾辞

(30) に関して注目すべきことは、ehinakoro (あなたのどこか) と ean (あなたがいる) の関係である。arka (痛い) と an (ある ・ いる) の人称が違うことが可能になる理由は、arka (痛い) の統語的な主語が 3 人称である ehinakoro でありながら、意味論のレベルの主語が 2 人称である「あなた」となっているからであると考えられる。さらに、このような食い違いが生じることを可能にするのは、ehinakoro における譲渡不可能な所有関係である立場だと考えられる。(30) のような例が極めて少ないため、上述の仮説を証明することは現段階で困難である。また、一般言語学的な観点からの分析としては、(30) は、所有者上昇 (possessor raising) という現象が起こっており、前章の他動詞と同様に所有結果相を表す wa an 構文の 1 例であると考えられる。

6 まとめ

本稿の中で最も中心的なものとなった第 5 章で述べた内容について総括する。

① 主体の変化を表す他動詞の場合にも、wa an 構文の an がその他動詞の目的語の人称・数と一致する例（＝目的語パターン）がある。先行研究によれば、これは適切な一致のパターンではない (中川 1981)。この現象を説明するための解決案として、wa an 構文が習慣相、または経験の完了を表すためにも使えるという可能性について考察した。

② 自動詞と共起した wa an 構文の an がその自動詞とは別の人称接辞を取る例がある。どの先行研究を参考にしても、これはありえないはずのパターンであることが読み取れる。このタイプの例は現段階で 1 つしかなく、実際に wa an 構文の例であることを示すのがまだ難しい。この例を説明するための解決案として、wa an 構文と譲渡不可能な所有の関係について考察した。

本稿で扱った両パターン他動詞の数は僅か 3 つでしかなかったため、他の動詞の一致パターンについては現段階で知ることができない。さらに、例数が少なかったため、本稿で扱ったデータから、両パターン他動詞の主語パターンと目的語パターンの割合について明らかにしたことは、どこまで正当であるかも判断しにくい。主語パターンと目的語パターンの割合についてより正確なデータを得るためにも、例数が増やされ、研究が続けば良い。

さらに、両パターン他動詞の一致のパターンに関してもう 1 つ調査すべきことは、wa an 構文で習慣相 ・ 経験の完了のような結果相以外の意味を表すことができるか

どうかということである。このことに関しては、現段階で仮定することしかできないが、両パターン他動詞の目的語パターンと wa an 構文の意味との関係を明らかにするためには、結果相の解釈が不明瞭な目的語パターンの例文を増やす必要があると考えられる。

また、自動詞と wa an 構文の間に生じる人称接辞の食い違いの例もどこまで有意義な例であるかを明らかにするために、さらに調査する必要がある。説明としては、主語における譲渡不可能な所有を考えたが、これに関して確実なことを述べるためには、更なる例を示す必要があると考えられる。

略語一覧

1S	1 人称単数	CONS	継続的	O	目的語 (A と S に対して)
1P	1 人称複数	CONJ	接続詞	OBJ	目的語
2S	2 人称単数	DES	希望	PL	複数
2P	2 人称複数	EP	挿入音	POSS	所有形
3	3 人称	EV	証拠性	RECP	相互
A	他動詞の主語	EXCL	除外的	REFL	再帰
ADV	副詞	IMP	命令法	S	自動詞の主語
APPL	適用態	INDF	不定人称	SBJ	主語 (自他を問わず)
AUX	助動詞	LCT	場所名詞	SG	単数
CAUS	使役	NEG	否定	TOP	主題
CONC	譲歩的	NMZ	名詞化辞		

参考文献 ・ 資料

佐藤知己 (2006) 「アイヌ語千歳方言のアスペクトーkor an、 wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 12: 43-67.

佐藤知己 (2007a)「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて—特に完了を表す形式をめぐって」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 13: 1-14.

佐藤知己 (2007b)「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26-3: 44-52.

佐藤知己　(2008)『アイヌ語文法の基礎』東京: 大学書林.

田村すず子　(1984) 『アイヌ語音声資料 1 －ワテケさんとサダモさんー (沙流方言) 会話・単語』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1985) 『アイヌ語音声資料 2 －ワテケさんの昔話－ (沙流方言) 』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1986) 『アイヌ語音声資料 3 －サダモさんの昔話－ (沙流方言) 』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1987)『アイヌ語音声資料 4 －福満 ・ 鵡川の歌謡－』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1988)『アイヌ語音声資料 5 －二風谷の昔話と歌謡 ・ 神謡－』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1989)『アイヌ語音声資料 6 －国松さんと幸作さんの昔話－ (二風谷・平取) 』東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1991) 『アイヌ語音声資料 (1-6) 語彙: O-Z』, アイヌ語音声資料 (1-6) 語彙 全用例つき 下巻. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子　(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』東京: 草風館.

田村すず子　(1997)「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『日本列島の言語』1-88. 東京: 三省堂.

田村すゞ子　(2013)『アイヌ語の世界』東京: 吉川弘文館.

知里真志保　(1942)「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3. 東京: 平凡社.

中川裕　(1981)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習 '81』131-141. 東京: 東京大学文学部言語学研究室.

中川裕・中本ムツ子　(2004)『CD エクスプレス アイヌ語』東京: 白水社.

Bugaeva, Anna　(2012)　Southern Hokkaido Ainu.　In: Nicolas Tranter　(ed.)　*The languages of Japan and Korea, Routledge Language Family Series*, 461-509. Routledge.

Nedjalkov, Vladimir P.　(1988)　*Typology of Resultative Constructions*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Tamura, Suzuko　(2000)　*The Ainu Language*. Tokyo: Sanseido.

On personal affixes in the *wa an* construction of the Ainu language

Abstract

In this paper, I will discuss the usage of personal affixes in the so-called *wa an* construction in the Ainu language. All my data in this paper is from the Saru and Chitose dialects of Hokkaido Ainu. The *wa an* construction is used to express the resultative aspect with various verbs, regardless of their transitivity, describing a change of state or location of any kind. It is placed after the predicate of a sentence. The *wa an* construction consists of a clausal conjunction *wa* 'and' and existential verb *an* 'to be(come)/to exist'.

The subject of the *an* verb can be coreferential either with the subject or object of the first (=notional) verb. In the case of an intransitive notional verb, the subject of the *an* verb is coreferential with the subject of the notional verb and shares with it the same subject marking, but if the notional verb is transitive, there are two possible patterns of agreement to follow. The subject of *an* can be coreferential with the object of the notional verb and then it does not share the same subject marking with the notional verb (the first verb's object is the second verb's subject). The criteria of determining which pattern is to be applied is semantic, namely the affectedness of the subject. If the subject is affected by the change of state or location expressed by the verb, the *an* verb of *wa an* will take the same subject agreement as that of the first verb, otherwise the subject agreement will be different from that of the first verb.

Nakagawa (1981) stated that certain transitive verbs which can be used with the *wa an* construction allow only the subject agreement pattern. However, while investigating examples of the *wa an* construction from data collected by Tamura (1984-1989), I managed to find a few examples of transitive verbs that Nakagawa (1981) described as allowing only the subject agreement pattern, and found out that most of the examples in fact followed the object agreement pattern. In addition to this, I also found an extraordinary example of an intransitive verb that does not agree with its subject. In this paper, I examine these examples in detail and discuss their possible implications for interpreting the *wa an* construction. I also point out the possibility that the non-agreeing example of an intransitive verb could be explained by the concept of inalienable possession.

受領日　2016年10月11日
受理日　2016年12月26日